

立ち会い人のまなざし

ほろいわ

褒岩 ナオミ

異文化コミュニケーション教育・ダンスセラピー

昨年12月号の本誌特集「再検証・佐藤由美子さんの出産体験」を読んだ時、こどもを産んだこともないわたしが共感できたのは、そこに提示された事柄が、わたしが日々、異文化コミュニケーションの現場において直面する課題そのものであったからだろう。それらをざっと列記すると、

- 1) 当事者の身になって考える
- 2) 嫌なことは嫌といい、わからないことは、わからないと伝える勇気と技術を持つ
- 3) 選択肢をひろげる
- 4) 思い込みを確認しあう
- 5) 自分の不安解消のために相手になにかを押しつけない

などが挙げられる。

これらは、そのまま、出産する側と、それをサポートする側とに求められる一種の「異文化コミュニケーション技術」ともいえるが、今回は、その詳細を論じるかわりに、これらを支える、技術以前の問題についてふれたい。

ある時期、わたしは「心身ともに冷え切った」状態が続いて、普通の生活ができなくなっていた。そうなった必然性については自分で腑に落ちることがあったものの、苦しい日々であったことに変わりはなく、まわりの理解ある人々に支えられて、ようやく近頃社会復帰ができるようになった。

その時期をふり返ると、わたしが立ち直っていく過程に不可欠だったと思われる存在がいる。それはカウンセラーやセラピストといった、こころを扱うプロだけではなく、同時代を生き、わたしが自分の芯からいのちを燃やすプロセスに立ち会ってくれた人々である。

彼女たちのまなざしは、強くてあたたかい。同じ、気づかってくれるのでも、自分自身の不安を

投影してくる「保護者的まなざし」は、どこかうっとうしい。それに比べて、「立ち会い人のまなざし」は、大丈夫だよといいながら、どこか淡々としている。実はこの淡々としたところがありがたかった。生きることにもがいている者にとって必要な距離と空間を適度に与えてくれたからだ。

この状況を、出産現場における妊婦と助産婦との関係にも当てはめて、助産婦さんを「立ち会う」ことのプロと呼ぶことはできないだろうか。

そこに求められるのは、経験、知識、技術だけではない。それらを、ベストなタイミングで提供できる「『場』へのセンシティブィティ」。いま、相手はなにを望んでいるのかを推し測ることができる「勘」。そして、自分の言動が相手におよぼす波紋をみる「想像力」。これらがあって初めて冒頭のコミュニケーション技術が活きてくる。

これは、なにも助産婦に限ったことではない。立ち直っていく病人を見守る看護者、混沌からなにかをつかもうとする子供を見守る親や教師に、共通に求められるまなざし——他者の、どこか脆く、傷つきやすい部分にふれながら、そのひとが変わっていくプロセスに立ち会うすべてのひとにたずさえてほしい、「立ち会い人のまなざし」である。

なんらかの技術知識を持った人間が、そうではない他者と共にいるとき、何もせずただそこにいるということは、実はかなり難しい。相手をサポートしたければよけいにそうだ。しかし、共に呼吸をしてくれるだけで、安心のできる、うっとうしくない存在。それでいて、必要な時には、必要なことを、確信に満ちた声で伝えてくれる。そんな存在の価値は、饒舌さだけではないことを最近久しぶりに教壇に戻ってつくづくと感じさせられた。